No. 128118

〔民俗編Part 12〕

# あるじでえ

No.24

世田谷区教育委員会　民家園係
〒157-0067 世田谷区喜多見5-27-14
◎ 次大夫堀公園民家園
☎ 03(3417)8492
◎ 岡本公園民家園
☎ 03(3709)6959

平成5年8月1日　発行
平成12年6月　増刷

## 世田谷の漁具

### ＜はじめに＞

次大夫堀公園民家園の管理棟には、区民の方々から寄贈された漁具が展示してあります。今回はこれらの漁具を中心に、かつて多摩川流域で行われていた漁撈についてお話します。

最近では多摩川もかなりきれいになってきましたが、昭和30年代に始まる高度経済成長の中で多摩川流域にも人口が集中し、家庭排水による汚染が広がりました。多摩川に面する世田谷南部地域でも、かつては鮎漁や屋形船で賑わいを見せていましたが、昭和40年を境に急激に衰えてゆきます。魚が棲めなくなった結果、専門の漁師が行う漁撈ばかりではなく、農家の人達や子供達が楽しみで行っていた漁も姿を消してしまいました。

多摩川流域に住む人達の中には、少年時代から青年時代にかけて多摩川で魚を獲った思い出を持つ人がたくさんいます。祖父や父親に連れられて、あるいは友達どうし誘いあって、多摩川流域で釣竿や網を使って魚を獲りました。より多くの魚を獲るためには、魚の習性を知っていなければなりません。川のどの場所にどんな魚がいるのか、昼と夜では魚の行動にどんな違いがあるのか、魚の産卵時期はいつで、どこに卵を産み付けるのか、etc.こうした魚の習性に加え、魚の名前や漁具の使い方に関しても、子供達は祖父や父親から教えてもらいました。それはまさに世代から世代へと語り継がれる伝承であり、文字に記録されることの少ない世田谷の歴史です。これからお話しする内容も、世田谷の歴史の1コマを語り継ぐものになると思います。

### ＜筌＞

細く裂いた竹を筒状に編んだ漁具で、水中に沈めて魚を捕獲します。センとかウエとも呼ばれますが、多摩川流域ではドウと呼ばれることが多いようです。

捕獲対象の魚の種類によって、ザコドウ・ウナギドウ・ナマズドウ・ドジョウドウに分かれています。専門の竹職人が作った筌を購入することもありましたが、ほとんどの人は自分で竹を裂いて作りました。

#### ザコドウ

ホンドウとも呼ばれるもので、筌の基本的な構造と機能を備えています。多摩川の上流から下流にかけて、およびその支流や両岸の農業用水域と、ザコドウが使われた区域は広範囲に渡っています。

ザコドウによって捕獲される魚の種類は多く、ウグイ・ヤマメ・カジカ・ナマズ・ウナギ・鯉・鮒・鮎など、多摩川に棲息するほとんどの魚がその対象となっていました。夕方に仕掛けておいたザコドウを翌朝早く引き上げると、数種類の魚がたくさん獲れていたそうです。

ザコドウを仕掛ける場合、川淵や岩陰などの魚が通りそうな川底に石や棒杭でザコドウを固定します。ドウが動くと魚が警戒

するため獲れなくなるそうです。

なるべく多くの魚を捕獲するために、ザコドウの入口の部分から放射状に石や土を積み上げたり、竹簀子や網などを使って魚をザコドウの中へ導くようにする場合もあります。また、魚をおびき寄せる方法として、蚕の蛹や田螺を砕いたもの、あるいはミミズや魚の内臓などを粘土と一緒に混ぜ合わせた団子をザコドウの中に入れたりもしました。

ザコドウの大きさは色々で、特に決まってはいません。細く裂いた竹を簀子状に編んで筒状にした後、一方の口にカエシと呼ばれるものを取り付けます。カエシは、1度中に入った魚が外に出られないようにするための仕掛けです。世田谷ではこのカエシのことをコシタと呼ぶ人もいます。

### ナマズドウ

昭和20年代までは、多摩川支流域にもナマズがたくさん棲息しており、5月から秋にかけて、筌を使ったナマズ漁が行われていました。ナマズドウにはカエシが2ケ所取り付けられています。

ナマズは夜間に移動する習性がありますから、ナマズの通りそうな流路に筌を夕方仕掛け、翌朝引き上げます。

### ウナギドウ

ウナギもかつては多摩川流域にたくさん棲息していました。多摩川本流やその支流ばかりでなく、農業用水路にも多くのウナギを見ることができ、様々な方法で捕獲されていましたが、筌を使った捕獲方が最も一般的でした。

ウナギドウを仕掛ける前にはまず、ウナギをおびき寄せるための餌を筌の中に入れます。餌はミミズが一般的ですが、蚕の蛹や砕いた田螺なども使われます。

ウナギは夜行性ですから、ウナギドウは夕方に仕掛け、翌朝早くに引き上げます。仕掛ける場所は、流れの緩やかなウナギのよく通りそうな場所です。経験豊かな人はウナギの通路をよく知っています。

筌による漁の他、ウナギブチによるウナギの捕獲も行われていましたが、ウナギブチを使う人はあまり多くはなかったようです。民家園に展示されているウナギブチは80cm程の竹の先に、10数本の鉄針が取り付けられており、この鉄針でウナギを突き刺して捕獲しました。

### ドジョウドウ

まだ多摩川流域に水田が広がり、化学肥料や農薬を使わない米作りが行われていた頃は、どの田んぼや農業用水でも多くのドジョウを見ることができました。

ドジョウを捕獲する筌は専用のドジョウドウで、簀子状に編んだものと笊状に編んだものとの2種類があります。ドジョウドウは他の筌と違い、カエシは1ケ所しか取り付けられていません。

筌を使ってドジョウを獲ることは、農家の人達や子供達の娯楽となっていました。漁期は5～6月頃から10月頃までで、稲が青々と成長した7～8月頃が最盛期だったそうです。

ドジョウを誘い込むために、砕いた田螺や煎り糠と田んぼの泥を混ぜて作った団子をドジョウドウの中に入れ、田んぼの水の取り入れ口に仕掛けます。ドジョウドウの上には重し代わりに田んぼの泥を乗せておきます。こうしてドジョウドウを仕掛け、4～5時間後に引き上げると、中はドジョウでいっぱいになっていたそうです。

## <ブッテ>

ブッテは細く裂いた竹を簀子状に編みあげて一辺を折り曲げて合わせ、その合わせた所に竹の柄を取り付けた割合に簡単な構造をした漁具です。ブッタイとかブッテアミなどとも呼ばれています。

ブッテを使った漁は多摩川流域を流れる

小川や農業用水路、および池や沼などで行われていました。ブッテの使用法は、手に持ったブッテを魚のいそうな所に沈め、足でブッテの中に魚を追い込むという大変単純な方法です。そのためブッテを使っての漁は、子供達の遊びの１つになっていました。

ブッテで捕獲することのできた魚の種類は多く、ヤマメ・カジカ・ウグイ・鮎・ウナギ・ナマズ・ドジョウ・カワエビ・モクゾウガニなどです。

## ＜網＞

多摩川流域で行われてきた網漁は、網で魚を囲んで獲る漁法、網に魚を刺して獲る漁法、網で魚を掬い獲る漁法、網で魚を覆い獲る投網漁法の、大きく分けて４つに分類することができます。

網を使っての漁は専従漁業者から子供達まで、多摩川流域に住む多くの人達によって行われてきました。しかしながら現在でも見ることのできるのは投網漁だけで、他の網漁は多摩川流域からほとんどその姿を消してしまったようです。

### 投網（なげあみ）

投網はトアミとかブチアミとも呼ばれる漁具で、絹糸や麻糸の撚り糸、後にはテグスやナイロンが材料として使われます。網の下部には鉛の錘が多数取り付けられています。

投網を使って獲ることのできる魚種は多く、ヤマメ・ウグイ・鮎・鯉・鮒・ボラなどです。投網の糸の太さや編目の大きさは獲ろうとする魚の種類によって違います。

投網を使って漁を行うことを、「投網を打つ」と表現します。投網を打つ場合、魚の群れていそうな水中めがけ、なるべく投網が大きく広がるようにして打ちます。水面に大きく広がった投網は、下部に取り付けられた錘の重さによって川底に沈み、魚を覆って逃げられないようにします。投網を打ったらすぐに、網を手繰り寄せて網を絞り、中の魚を捕獲します。普通、投網の下部には袋状になった網（フクロと呼ばれる）が取り付けられており、網を手繰り寄せると、魚がこのフクロの中に入るようになっています。

鮎のような俊敏な魚は、投網を打った時に素早く石の間などに身を潜めてしまい、網を手繰り寄せる間にわずかな隙間から逃げてしまうことがあります。そこで鮎を投網で獲る場合には、投網を打ってもすぐには手繰り寄せずに、腰に下げたビクの中の箱眼鏡（ノゾキ眼鏡とも呼ばれる）を使って水中をのぞき、まだフクロの中に入っていない鮎をヤスで突いて獲るのです。

### ドウアミ

民家園に展示されているドウアミは昭和30年代までは使われていましたが、ドウアミを使って漁をしていた人はほとんどいなかったようです。

このドウアミは手作りで、長さは約８ｍもあります。ドウアミを仕掛けるのは多摩川本流ばかりではなく、農業用水路にも仕掛けられていました。

ドウアミで捕獲される魚はナマズやウナギばかりでなく、川に棲息するあらゆる魚を獲ることができました。ドウアミを仕掛けるのは夜間よりも昼間の方が多く、網の入口を上流に向けて広げます。

ドウアミの基部の所は３層に分かれており、各層の入口にはそれぞれコシタと呼ばるカエシが取り付けられています。コシタは中に入った魚が外に逃げださないようにするための仕掛けです。

### タモアミ

多摩川流域で行われていた漁法の１つに、柄の付いた網を使って行う掬い網漁があります。タモアミも掬い網の１種で

す。タモアミの網が張られている部分はカヤの木の枝が利用されています。

掬い網漁では、夕立後などの増水した川の岸辺付近を上流から下流に向って網で掬います。増水した川では、魚は岸辺近くに集まる習性があるのです。ヤマメ・ウグイ・カジカなどを掬い網漁で獲ることができました。

また、魚のいそうな場所（葦の茂っているような所）の少し下流にブッテのようにタモアミを置いて、その上流から足や棒を使って魚を追い込んで掬い獲る方法も行われていました。

掬い網の代わりに利用されたものに、笊類があります。笊はどこの家庭にもある身近な道具で、米磨ぎ笊や箕笊を使って子鮒やドジョウ、カワエビなどを獲ることができたそうです。

### アミビク

アミビクは捕獲した魚を入れておくものです。魚の種類によって大小様々なアミビクが使われました。船上から投網を打って魚を獲った時には、アミビクの中にその魚を入れて船べりから川の中に吊り下げておくようにしていました。多摩川で使う川船にイケスが取り付けられるようになったのはずっと後になってからで、当初はイケスのない船が多かったため、アミビクが使われていたということです。

アミビクに似た漁具にスカリと呼ばれるものがありました。スカリは縁にアミビクのような竹輪がなく、紐で絞めるようになっていました。

## ＜ジョレン＞

かつて多摩川流域で行われていた漁法に、瀬付き漁と川干し漁がありました。瀬付き漁は川の一部に人工の産床を作り、そこに産卵のために集まるハヤやマルタを捕獲する漁法です。産床は大小の石を敷きつめて作りますが、この時小石を集めるために使用する道具の１つがジョレンです。

一方川干し漁は、川や農業用水の一部を塞き止め、水を干し上げたり掻き出して、閉じ込められた魚を捕獲する漁法です。水の流れを塞き止めるためにはジョレンなどの道具を使って小石を掻き集め、人工の堰を作ります。イワナ・ヤマメ・カジカ・鮎・ウグイ・ウナギ・ナマズ・鯉・鮒・ドジョウと、多摩川流域に棲息するあらゆる魚を川干し漁で捕獲することができました。川干し漁は主に農家の人達や子供達が娯楽をかねて行っていた漁法の１つです。

## ＜ヤスと銛＞

ヤスと銛は魚介類を突き刺して捕獲する槍状の漁具です。竹竿などの長い柄の先に針のように鋭くとがった数本の鉄製の鉾が並列して取り付けられています。突き刺した魚が外れないように、それぞれの鉾にはカエシと呼ばれる突起が付いていることがありますが、多摩川流域ではこれをアゴと呼んでいます。

ヤスと銛の区別は不明確で、多摩川流域では小さくて短い方をヤスと呼ぶのに対して、大きくて長い方を銛と呼ぶ一方、同じものを同一名称で呼んだりもしています。

ヤスを使う場合には、岸辺から水中の魚をねらって突き刺したり、船の上から箱眼鏡で水中をのぞきながら獲物を刺したりします。夏の暑い頃には、ヤスを手にしたまま水中に潜り、岩陰などに潜む魚をヤスで捕獲することもありました。

箱眼鏡は木箱の底面にガラス板が張りつけてあり、ガラス面を水中に漬けることによって、水中をのぞくことができるようになっています。ガラス板を張りつけた箱眼鏡が多摩川流域で使用されるようになるのは明治中期頃と言われています。

文化財資料調査員　高見寛孝